

食育情報リンクネットながの総会・情報交換会概要

- 1 日 時 平成23年12月16日（金） 15：15～17：30
- 2 場 所 長野第2合同庁舎 5階共用会議室
- 3 参加者 「食育情報リンクネットながの」会員など27名

4 総会議題

- (1) 平成23年「食育情報リンクネットながの」活動報告
- (2) 平成24年「食育情報リンクネットながの」活動計画
- (3) 平成24年世話人の選出
- (4) 申し合わせの承認
- (5) 質 疑



- 5 フード・アクション・ニッポンの案内について説明
- 6 食育活動発表

「農業体験民泊を通じた食育への取り組み」

のぶさと

信里食育体験民泊受け入れの会 副会長 宮下 高広 様
副会長 柳沢 久恵 様
事務局長 青木 克彦 様

- (1) 活動報告資料を基に、①発足経緯と目的、②学校側の求めていることや感想、③問題点と今後の課題について青木事務局長から説明。
- (2) 受け入れ側から見た農業体験の視点や、食体験や調理体験を通じた子供達の様子等について宮下・柳沢両副会長から説明。
- (3) 質問・意見
質問：「体験型民泊」と「交流型民泊」の違いいかん。
回答：「体験型民泊」は、川遊びや木工細工等の体験メニューを充実し、利用者が選択できるようにしたものであり、一方、「交流型民泊」は、利用者に農家の日常作業や生活を体験させるものである。
回答：受入の会の事務局体制や経理はどうなっているのか。
回答：事務局は自分達だけで対応している。NPO法人にもなっていない。

人件費も持ち出しである。

経費は、利用者からの食費（1,000／人）と保険費用代（400円／人）及び長野市農業公社からの補助金で賄っている。

7 情報交換会

(1) 「我が国の食生活の現状と食育の推進について

～第二次食育推進基本計画における食育推進のポイント～

食育情報リンクネットながの事務局より説明

(2) 食育に係る参加団体の取り組みについての情報交換

- ・ 「コープながの食育の取り組み」について、参加者から説明あり。
- ・ 食育についてはいろいろな立場の団体が取り組んでいる。「民泊の会」の取り組みについても、それら団体を活用すれば和が広がると思う。

また、国や県の補助金を活用するなどして、できるだけ自己負担を減らし、未永く活動していただきたい。

- ・ 長野県食育推進協議会が、JAレベルから県へ移行することだが、今後は国、県、市、地域のNPOの活動にさらなる繋がりができるのではないかと感じている。
- ・ 民泊の体験は地域づくりに役立っており、子供達にも良い影響を与えている。都会や田舎の子供達が交流していけるような基盤ができることが大事だと思う。

地域づくりは米づくりや人づくり同じだと思っている。米づくりは、田んぼがなければ稲は育たない。それと同じように人づくりは、地域が良くならなければ、良い人が育ってこない。

農文協では箱膳運動を小学校や地域で行っている。行政にも後押しをしていただいております、食育の輪を広げている。

- ・ 日本食、郷土食が昔に比べて変わってきている。農水省で取り組んでいる「日本食文化を世界無形遺産に」のパンフにあるように、日本の郷土食の取り戻しが起こってきている。その中心的舞台は都会ではなく農村であり、それを守ってきたのは生産現場である農家ではなかったのかなと思っている。
- ・ 県としては、長野県食育推進協議会事務局の来年度の設置に向けて活動している。各機関と連携を深めた形でやって行きたい。

県でも平成19年度に推進計画を策定しており来年度が最終年である。現在、第二次の長野県の食育推進計画を策定中。そこで、県民の食生活等の実態が計画策定の上で必要になってくる。平成22年度に健康栄養調査を実施したので、その結果も来年早々には出す予定。

また、今、県で健康長寿長野食育強化キャンペーンをやっているのでご覧いただき、ご協力をお願いしたい。

- ・ 県レベルでのデータから得られる特徴や傾向を、こういう場で勉強したり、

議論をお願いしたい。

質問：本日の資料で色々データをいただいているが、それをつなぎ合わせ、実践するために具体的にどうやっていくのかが問題だと思う。

信里地域での取り組みは、人間革命で、子供達が「生きる」、「食べる」ことの革命をしているのだと感じた。そういう活動を子供や学校がどうして受け入れられたのかお聞きしたい。

回答：先生方や子供達の意向を聞いてやったわけではない。当初心配したのは、地域の子供達がやっていないのに、都会の子供を受け入れることに意味があるのか、立ち上げて来てくれないとの心配があった。

旅行会社が私達の取り組みの姿勢とか、熱意とかに感動して協力していただいた。結果的に先生が決めてくることであるが、なぜこれだけのブームになっているかは、農水省・文科省・総務省三者合同で農山村交流プロジェクトを積極的に支援していることや体験した学校の感想が良かったことで波及したのでないかと感じている。

質問：先生方も一緒に泊まって体験しているのか。

回答：先生方はホテルに戻って泊まり、生徒の体験場所を巡回している。

- ・ 子供達の体験はある程度条件は揃って来ているが、教員の場合は勉強できる機会が少ない。お金に変えられない豊かさが農村にある。そこに子供達は感激する。

25歳以上の教員は農業体験がない中で実務を行っている。50歳以上の教員はある程度知っていると思うが、その層のところはスッポリ抜けていることに弱点がある。

8 閉会



